

海南島の2村落における生業の転換：政策，換金作物，観光開発の影響
Subsistence Transformation in two communities in Hainan Island: Impacts of Policy,
Cash Cropping and Tourism Development

梅崎昌裕
UMEZAKI Masahiro

1. はじめに

海南島は中国大陸の南側に位置している。2000年の統計によれば島に居住する人口はおよそ700万人で、そのうち100万人が「リー」と呼ばれる少数民族である（本稿では中国語の慣習に従い、リー族と呼ぶ）。リー族は、海南島の中央山岳地帯および島の西側に居住している。

中央山岳地帯に居住するグループは近年まで焼畑・狩猟採集・水田農耕からなる複合的な生業を営んでいた。ところが、1988年に海南島が広東省から独立して海南省となり、中央政府から「経済特区」に指定されると、中国の大陸部あるいは海外からの事業投資が激増し、地方政府の主導による換金作物の導入と観光開発を柱とする農村開発が本格化した。このプロセスで、農村社会も生業の市場経済化を余儀なくされ、自給的な複合生業は、より単一の作物に特化した市場依存型の生業に転換した。その結果、生活の満足度、食生活、労働形態、健康状態など人々の生存の諸側面も大きく変化しつつある。

本報告では演者をふくむ共同研究グループが2000年から実施してきた海南島調査の成果のなかから、2つの村落における生業の転換の事例に焦点をあて、環境政策、換金作物の導入、観光開発などの外的な介入に対して、人々がどのように対応してきたかを紹介する。

2. 対象村落の概況

対象村落は五指山市の水満村と保力村である。20世紀前半に書かれた民族誌から推測すると、当時、いずれの村落においても焼畑農耕・狩猟採集・水田耕作を中心とする自給的な生業が営まれていた。その後、1950年代から1980年初頭にかけての人民公社による集団経営を経て、1980年代中頃より世帯責任による農業経営がすすめられてきた。

水満村は亜熱帯の極相林におおわれた五指山の山麓部に位置している。1980年代まで町からの道路がなく海南島のなかでも最も開発の遅れた地域であったが、1990年代にはいると亜熱帯の極相林と歴史的にも有名な五指山を観光資源とする開発が始まり、現在では入場料を徴収するゲートのある観光村へと変貌した。時を同じくして、観光資源である森林の保全を目的とした条例が施行され、村落周辺における焼畑と草原の火入れ、狩猟採集が全面的に禁止された。

一方、保力村では国道に隣接した立地を生かして、1980年代よりパラゴム、バナナ、リュウガン、ライチ、コショウなどの換金作物が盛んに導入された。かつて焼畑として利用されていた山の斜面はすべて換金作物の畑に変わり、畑に侵入して換金作物の苗を食べる虞のある水牛は村につないで飼われるようになった。現在では、早稲のかわりにキュウリなどの換金作物を栽培する世帯も多い。

3. 外的な介入への対応

水満村の食生活で印象的なのは、水田耕作が行われている時期に、水田内・畦・のり面・水路など水田の周辺部に自生する野草を頻繁に食べることである。演者の調査によると、水路に自生する38種類の野草のうち25種類、畦に自生する29種類のうち5種類、水田内に自生する19種類のうち8種類が、それぞれ米の副食として食べられていた。いくつかの状況証拠から推測すると、水田周辺の野草の集約的利用は、焼畑農耕と狩猟採集というそれまで食生活に重要な意味をもっていた生業が政府の政策により全面的に禁止されたことに対する対応とも考えられる。中華鍋、ブタ油、味の素の導入は、ゆでただけではおいしくない水田周辺の野草を、お米の副食に適した味に調理するのに寄与したであろう。水利システムの整備、ハイブリッド品種の導入による米の生産性の増加ともあいまって、水満村では、焼畑と狩猟採集の禁止にもかかわらず、米と水田周辺の野草、余剰米と交換して入手した肉類を中心とした、栄養学的に妥当な食生活が可能となっている。

一方、保力村においては、水田周辺に自生する野草の種類・量ともに水満村より少なく、それは人々にとっての重要な副食になっていない。この背景には、村につないで飼われていた水牛の餌として水田周辺の野草が用いられていたことが影響していると考えられる。保力村の換金作物は、バナナ、パラゴムなどの比較的安定した収入の見込める作物から、ライチ、リュウガンなど栽培技術が難しく市場価格の変動が大きい投機的な作物に重点を移しつつある。ほとんどの作物は、依然として生育段階にあり、肥料や農薬への経済的投資は余剰米の販売によってなんとか賄われている状況にある。人々の食生活は、特に肉類の摂取という側面において水満村よりも貧弱であり、すくなくとも換金作物の収穫が本格化するまでの期間は、経済的にも栄養学的にも厳しい状態を人々は耐えなければならない。

4. 生活の満足度

水満村では、観光開発によって住民の一部は観光会社に雇用され、観光客に物品を販売することによる現金獲得の機会も増加した。それにともない、人々の生活の理想は、「酒を飲んで肉を食べる」ことから、より近代的で経済的に豊かな生活をおくることへと変貌しつつある。一方で、保力村の人々は現状の厳しさを将来の豊かな生活を夢みることで克服しているようにもみえる。農村開発は、外部からの介入、村の中での意志決定、外部市場の状況など、複雑な要因に影響されるものであり、その相互関係性を解き明かすためには、学際的な視点による長期間の観察研究のさらなる蓄積が必要であると考えられる。